

-----  
[ 成果情報名 ] スプレーギクの短茎・高生産を目的とした苗生産技術

[ 要約 ] スプレーギクの70cmの切り花長を得るためには、親株からの挿し穂の長さを10cmとし、育苗期間を2週間として、直接短日定植法により栽培する。挿し穂の収量は採穂時期により変動し、夏季の高温期及び冬季の低温寡日照期には収量が減少する。

[ キーワード ] スプレーギク、短茎・高生産、直接短日定植法、育苗技術

[ 担当部署 ] 花き部・花き栽培チーム

[ 連絡先 ] 092-922-4958

[ 対象作目 ] 花き・花木

[ 専門項目 ] 栽培

[ 成果分類 ] 新技術  
-----

[ 背景・ねらい ]

キクの切り花生産では、切花長が95cmとなるように管理するため、1作当たりの栽培期間が100～120日を要し、年間作付回数は2.5回が限度である。しかし近年、実需者から切り花長は最低65cmあればよいといった指摘があり、キク経営の低コスト化や生産性向上に向けた新しい作付け体系を確立する必要がある。

収穫時の切花長を70cmに設定した場合の1作当たりの栽培期間は、直接短日定植法の活用により60日以内、施設の年間利用効率は5回転が可能となる。そこで、直接短日定植法を用いた短茎・多収栽培における苗質の改善及び苗の周年・安定生産技術を確立する。

[ 成果の内容・特徴 ]

1．スプレーギクの直接短日定植法では、親株からの挿し穂の長さを10cm、育苗期間2週間とすることにより、70cmの切り花長を確保できる。挿し穂の長さが5cmでは、切り花長は70cm未満となり、また15cmでは切花長は長くなるが花蕾数が減少する(表1)。

2．挿し穂の長さを10cmとした場合、年間の挿し穂収量には品種間差があり、「レミダス」では1,921本/m<sup>2</sup>、「セイエルザ」では1,949本/m<sup>2</sup>、「セイローザ」では2,229本/m<sup>2</sup>である。また、挿し穂収量は採穂時期によって異なり、最大200～300本/m<sup>2</sup>/月である(図1)。

[ 成果の活用面・留意点 ]

1．直接短日定植法を用いた短茎・高生産における育苗技術として活用できる。

2．高温時及び低温寡日照時には挿し穂の収量が減少するため、必要苗数を確保するためには親株の栽植密度や栽培規模に配慮が必要である。

[ 具体的データ ]

表1 挿し穂の長さ及び育苗期間と直接短日定植後の生育、開花及び開花時形質(平成17年)

挿し穂の長さ (cm)	育苗期間 (週)	直接短日定植時 茎長 (cm)	葉数 (枚)	平均 開花日 (月/日)	到花 日数 (日)	切花長 (cm)	切花重 (g)	花数 (輪)
5	2	5.3 f	4.5 g	11/17	56 ab	65.7 e	72.3 ab	23.3 a
	3	7.8 ef	6.1 efg	11/15	54 bc	58.1 f	55.4 c	19.2 abc
	4	10.8 d	8.6 cd	11/13	52 c	69.3 de	62.5 bc	15.6 c
10	2	9.8 de	5.6 fg	11/17	56 ab	78.0 bc	80.6 a	22.0 ab
	3	13.4 c	8.2 cde	11/16	55 b	76.8 c	74.0 ab	19.3 abc
	4	18.1 b	12.1 ab	11/13	52 c	80.2 abc	78.0 a	17.8 abc
15	2	14.2 c	7.9 def	11/19	58 a	84.3 ab	72.6 ab	16.0 bc
	3	18.2 b	10.3 bc	11/15	54 b	82.0 abc	74.4 ab	18.9 abc
	4	23.4 a	14.9 ab	11/12	51 cd	86.0 a	76.9 a	15.2 c

- 注) 1. 供試品種: 'セイエルザ'、定植: 2005年9月26日  
 2. 育苗は、昼20/夜15 設定の人工気象室において管理  
 3. 同一列内のアルファベットはTurkeyの多重検定により5%水準で有意差あり

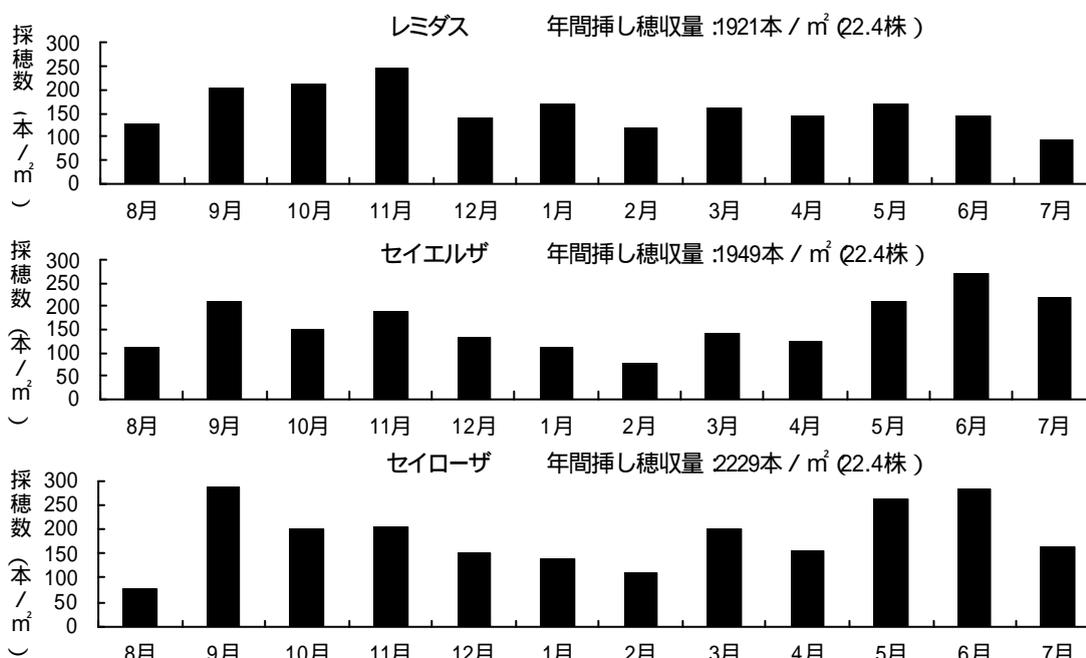


図1 品種別、月別挿し穂収量の推移(平成18年)

- 注) 1. スギ皮養液耕、株間15cm×条間20cmの2条植え、大塚ハウス1, 2号を用いて培養液のECを1.5ds/mに調整して施用。  
 2. 温度は日中25 で換気、夜間最低15 で管理

[ その他 ]

研究課題名: キクの短茎・高生産技術の開発

予算区分: 経常

研究期間: 平成19年度(平成17~19年)

研究担当者: 国武利浩、松野孝敏、谷川孝弘、巢山拓郎、山田明日香